

クロスアップ
インタビュー

元鉄工企業社社長 代表取締役社長 大林 淳 さん

鋳物の火は消さない！



(プロフィール) 加区西川島町の加鋳工業株式会社代表取締役、平成2年から現職、加区鶴ヶ峰在住、43歳

「鋳物という(キューボラのある)街」という映画が思ひ出されます。

大林 重工業の隆盛期には鋳物工場の数も多かった。主に産業機械や自動車の部品を製造します。図面をもとに作らせた木型を使って鋳型を製作。そこに如で溶かしたアルミや青銅を流し込みます。冷却して砂型から外した物を研磨して完成します。

現在、横浜市内に約20軒の鋳物工場がありますが、2メートル以上の大物を吹ける工場は県内でもわずか。うちではアルミでも50キロの物も吹きます。如くで溶かすアルミは約900キロ必要。どろどろに溶か

した金属を型に流し込む経路を「湯道」と呼びますが、そこから溶けたアルミが流れ出したら大変なことになる。流し込む砂型も直径3メートル近くになるの

で、ひっくり返すのにクレーンを3つも使う大がかりな作業。危険と隣り合わせですから、1週間くらい前から夜も寝られないくらい緊張します。

「いつからこの仕事に?」大林 昭和52年に県商工を卒業、三菱エンジニアリングの設計部門に入社しましたが、大企業でのデスクワークがどうも性に合わな

い。会社を辞めて家業に就き、父は「仕事キロ必要。どろどろに溶か

あさっていました。それでも奮起してアルミの鋳物も始めてくれました。青銅とでは炉も違うので設備投資も大変でした。

「産業構造の変化の影響は大きいですね。」大林 大型部品は自動車関連のものが多いので、自動車産業の景気が大きく影響します。しかし景気が悪いと言っているにもかかわらず、機械部品の受注が減っている分、鋳物屋同士が価格競争で首を絞めることにならないよう、生き残りをかけ、さまざまな方法を模索しています。

「下請けだけでなく、自社製品を作りたい」というのは工場主ならみな夢見ること。青銅を使った鋳物の骨造づくりや花びんを作ったりしました。数カ月の試作を経て、ようやく完成。鋼の殺菌作用のため普通の花びんより1週間は花が長持ちします。首相を辞任したばかりの羽田孜さんが横浜市の役所にみえた時、花びんを進呈したことも。

「これからの抱負は?」大林 経済不況はますます深刻になり、中小者には本当に厳しい時代。それでもこの仕事は天職だと思っているから工場をたたもうと思つたことは一度もありません。息子2人と娘が1人いますが、最近になって

「跡を継がなくていい」と言った親父の気持ちがよくわかる。自分の仕事を我が子が継ぐと言ってくれるのは、もちろんうれしい。でも仕事が減っていくのは目に届いている。その葛藤(かつと)の中で、親父はアルミ鋳物を始めてくれた。私も将来に希望を持てる魅力のある会社にしたうえで、子どもに託していきたい。それが今の目標です。

昨年からは表札の受注も